

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ベトナム客家の移住とアイデンティティ： ンガイ人に関する覚書

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 洋尚, 呉, 雲霞 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5598

ベトナム客家の移住と アイデンティティ ——ンガイ人に関する覚書——

河合洋尚 呉雲霞

摘要：根据来源及语言文化的差异，越南的客家人在政治上被区分为华族（the Hoa）和艾族（the Ngai）。迄今为止，有关越南客家的研究成果有限，尤其缺乏围绕越南战争后越南客家的民族志研究。越南战争结束后，越南客家人离散到世界各地。本文通过汇集对南越华人、北越华人、越南归侨的访谈资料，多角度描述属于艾族的客家人，分析这一客家族群的跨境流动与族群意识。

キーワード：ンガイ人 客家 ディアスポラ ベトナム

1. はじめに

2013年3月、筆者（河合）は、中国広州市で開催された国際シンポジウムに参加した後、同シンポジウムに参席していた末成道男、大西和彦、チュ・スワン・ザオの各氏と、客家の故郷として知られる梅州市に赴いた。梅州市ではまず嘉応大学客家研究所を訪問したが、その時、房学嘉所長は三氏がベトナム調査に従事していることを知り、ベトナムの客家の概況について尋ねてきた。近年、東南アジア諸国の客家をめぐる研究は増加しているが、その大多数はシンガポール、マレーシア、インドネシアであり、客家研究者の間ではベトナムの客家についてほとんど研究がなされていない⁽¹⁾。それゆえ、当時はベトナムの客家について知る情報が少なかったのであるが、この時、末成氏からベトナムで客家が一つの少数民族になっていることを即座に指摘していただいた。この少数民族は、ンガイ族（以下、「ンガイ人」と表記する）と呼ばれる⁽²⁾。

周知の通り、客家は世界中に分布するエスニック集団ではあるが、移住先で一つの少数民族として認定されている事例は珍しい。また、ベトナムでは華僑・華人に相当するホア族という民族がいるが、ホア族の一部にも客家はいる（以下ホア族籍の客家を「ホア客家」と表記する）。では、なぜベトナムでは客家が異なる民族に分かれているのだろうか。なぜン

(1) 河合洋尚「東南アジアにおける客家研究の新傾向」『国立民族学博物館研究報告』38-1、31頁、2013年。

(2) ベトナム研究ではガイ族と表現されることが多い。ただし、中国研究では、客家語で「私」を指すNgaiを「ンガイ」と呼ぶことが多いので、本稿ではンガイ族と表記する。

ガイ人は独立した少数民族として認定されたのだろうか。そもそもンガイ人とホア客家とはどのように異なるのだろうか。こうした関心に基づき、河合は、ベトナム研究を専門とする呉とともに共同研究を開始した。

まず我々が取り組んだのは、ンガイ人に関連する文献の整理である。我々は、各自の語学能力を生かし、日本語、中国語、ベトナム語、英語、フランス語の文献を探し、それを解題することから始めた。その結果分かったのは、ンガイ人をめぐる記録や研究は世界的にみても限られているということである。管見の限り、ンガイ人を主題とした書籍は存在しておらず、関連する論文も数えるほどしか見当たらない。もちろんンガイ人について断片的に触れている文献は存在するが、その大多数は、概況説明、歴史的記録、民族形成史に関するものであり、とりわけフィールドワークに基づく現代のンガイ人に関する民族誌的記述に乏しい。したがって、現在、ンガイ人がどこに住み、どのような生活を送っているのかについてすら、文献から知ることは難しい。

こうした状況を鑑みて、我々は、ベトナム南部のホーチミン、ビエンホア、北部のハノイ、ハイフォン、および中国の華僑農場に出掛け、数度にわたるフィールドワークを実施した。我々の調査はまだ途中段階であるが、それでもベトナム客家の基本的な情報を入手することができた。特にンガイ人については、ベトナムや中国でンガイ人に直接会ったり、ンガイ人と接触があったベトナム華人から昔日の様子を聞いたりなどして、第一次資料を入手した。後述するように、ンガイ人は現在ベトナムにほとんどおらず世界各地に移住しているため、口述資料を得ることが困難である。本稿では、ンガ

イ人にまつわる移住、アイデンティティ及びそれと関係する生活実践を覚書として紹介することで、今後のンガイ人研究のための基礎資料を提示することにしたい。

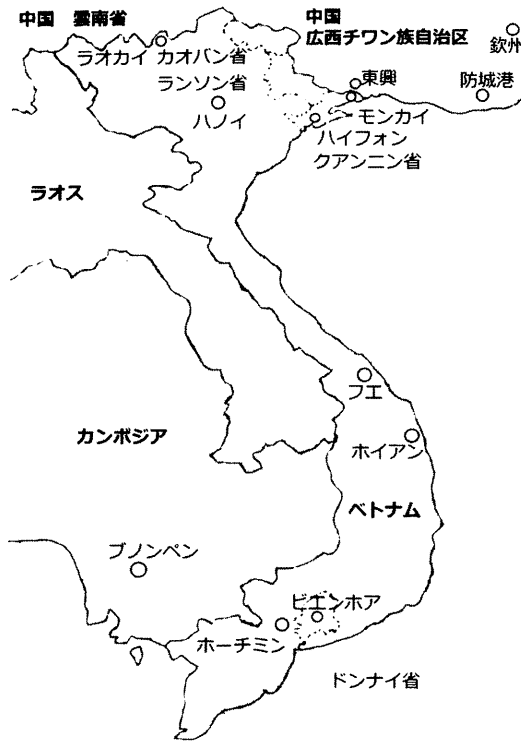
2. ンガイ人の移住と民族形成

ベトナムは中国西南部に隣接しており、歴史的に中国の影響を強く受けてきた国である。ベトナムへの華僑・華人の移住は相当古くにまで遡ると考えられ、特に16世紀になるとベトナム中・南部への移民が増加した⁽³⁾。現在、ベトナムではマジョリティであるキン族のほか、53の少数民族が認定されているが、そのうちンガイ、ホア、サンジウの三つの民族が漢族に分類されている。冒頭で述べたように、客家と関わりがあるのは、ンガイ人とホア族であり、ンガイ人の主要構成員は客家である。他方で、ホア族にはさまざまな出身の漢族が含まれているが、「五幫」と呼ばれる五大派閥の一つは客家となっている⁽⁴⁾。ただし、ンガイ人とホア客家は、同じ客家といっても、ルーツ、言語、文化などに違いが見られる。

では、ンガイ人のルーツは中国のどこなのであろうか。また、なぜンガイ人だけが独立した少数民族に認定されているのであろうか。これらの問題についてはすでに研究がある。

(3) 末成道男編『ベトナム文化人類学解題——日本からの視点』、東京外国語大学アジア・アフリカ文化研究所、2008年。

(4) ベトナム北部のサンジウ族農村で調査をしたベトナム社会科学院のトラン・アン・ダオ氏によると、サンジウ族は広東語を話すガオ族である。ただし、同機構のチュ・スワン・ザオ氏は、サンジウ族のなかに「ンガイ」を自称する者がいると言い、サンジウ族にも客家がそれに近い集団が含まれている可能性も捨てきれない。サンジウ族と客家の関係についての調査は、今後の課題としたい。



地図 1 : ベトナム地図

まず、古田元夫と範宏貴によれば、ンガイ人は、広西チワン族自治区（以下、広西省と表記する）から移住してきたという。彼らは、主に防城（現在の広西省防城港市）からベトナム東北部に移住し、クアンニン省、ランソン省などに定住した⁽⁵⁾。ンガイ人がいつ頃からベトナム東北部に移住していたかについては定かではない。しかし、フランスの軍医であ

(5) 古田元夫『ベトナム人共産主義者の民族政策史——革命の中のエスニシティ』大月書店、1991年、428頁。範宏貴『越南民族与民族問題』広西民族出版社、1999年、219-220頁。

ったバイランによると、19世紀の最初の20、30年代にはモンカイにはンガイ人が移住していたという。ンガイ人は、フランス統治時代（1887～1954年）以前には、ベトナムに居住していたと考えられる⁽⁶⁾。

広西省から移住してきたンガイ人は、主に農耕に従事してきたが、なかには水上生活者として漁業に携わっていった者もいた⁽⁷⁾。彼らは、フランス統治前からベトナムに移住してきたため、周囲の少数民族であるヌン族やキン族と変わらない生活を送っており、これらの民族との混血も進んでいたとされる⁽⁸⁾。さらに、1939年刊行の『佛領印度支那に於ける華僑』では、南部には客家がいると記述しているのに対し、北部の華僑は広東人、湖北人、雲南人が主流であると書かれている⁽⁹⁾。日本の調査員は、ンガイ人を華僑や客家とみなさず、他の民族であると認識していた可能性がある。

古田によると、第一次インドシナ戦争時（1946～54年）の間、ンガイ人の人口は約10万人であった。古田は、そのンガイ人がどのようにして一つの少数民族＝ンガイ族として認識されるようになったのか、民族形成のプロセスについて論じている。まず、1948年に中国共産党が介入すると、ンガイ族はヌン族ではなく華僑として扱われるようになった。そして、1973年にベトナム政府は、ンガイ人を「華民族」に分類し、兄弟国である中国との「友好の絆」としての役割を期待した。

(6) Vaillant, L. “L’Etude anthropologique des Chinois Hak-ka de la province de Moncay (Tonkin),” *L’ Anthropologie*. 30: 83-109.

(7) Dang, N. V., Chu T. S., and Luu H. *Ethnic Minorities in Vietnam. Vietnam: The Gioi Publishers*, 2000, 236-237. 範宏貴『越南民族与民族問題』広西民族出版社、1999年、220頁。

(8) Vaillant, L. “L’Etude anthropologique des Chinois Hak-ka de la province de Moncay (Tonkin),” *L’ Anthropologie*.

(9) 満鉄東亜経済調査局『佛領印度支那に於ける華僑』開明堂、1939年。

ところが、1975年にベトナムが統一されると、中国への不満と脅威を感じたベトナム政府がそれまでの政策を一転させ、華僑にベトナム国籍の取得を求めた。1970年代後半にはベトナム—中国間の関係悪化に伴い、ンガイ人を含む多くの華僑・華人がベトナムを離れていった。こうした事態に対処するため、ベトナム政府はンガイ人を独自の少数民族として認定したが、すでに大多数のンガイ人は中国、アメリカ、カナダ、オーストラリアなどに流出していた⁽¹⁰⁾。2012年に刊行されたベトナム民族の概説書によると、ンガイ人の人口は1035名である⁽¹¹⁾。

ンガイ人の少数民族認定が比較的遅く、また国内人口が少ないためか、我々が調査した限りにおいて、彼らは「ンガイ族」との認識が乏しい。高齢者のなかには、ンガイ人とは自称するが、「ンガイ族」という言葉を聞いたことがない人々すらいた。他方で、ンガイ人のルーツと移住に関しては、先行研究で指摘されている内容と、ほぼ同じ話を現地で聞くことができた。すなわち、ベトナムや中国でンガイ人から聞いた話によると、彼らの祖先の大多数は、現在の広西省防城港とその附近から移住している。彼らの祖先のなかには、防城港にある那良鎮（写真1）からの移住者が最も多いが、同じ広西省の東興、北海、欽州および広東省の廉江から陸路でベトナム東北部に移住した者もいた。また、1954年までンガイ人の本拠地は、クアンニン省などのベトナム東北部であり、し

(10) 古田元夫『ベトナム人共産主義者の民族政策史——革命の中のエスニシティ』大月書店、1991年、429-435頁；『ベトナムの世界史——中華世界から東南アジア世界へ』東京大学出版会、1995年、187-188頁。

(11) 『The Great Family of Ethnic Groups in Vietnam: Viet Nam A Radical Approach』、2012年、94-95頁による。

かも相当数のンガイ人がこの地にいたことは、現在でもハイフォン在住の華人から聞くことができる。



写真1：ンガイ人の「故郷」の一つである那良鎮

ただし、現在のベトナム東北部にはンガイ人はほとんどいない。我々が聞いたオーラル・ヒストリーによると、ンガイ人は、1949年にベトナムが独立してから、主に二度の波を通してベトナム北部から離れている。

その第一の波は1954年である。この年、ディエンビエンフーの戦いによりフランス軍はベトナムから完全に撤退することになったが、同時に北緯17度線で南北が分裂した。それにより、北部の華人が南部に大量移住し、そのなかにンガイ人が含まれていた。現地の華人は、この移住を「南徹」と中国語で表現している。

第二回目の波は1978年から79年である。この時期、ベトナムでは華人排斥運動が強まり、ベトナム全土の華人が、故郷である中国に戻ったり、アメリカ、カナダ、オーストラリ

アなどの第三国に移住したりした。それにより、特に北部に居住していたンガイ人のほとんどは、ベトナムを離れていった。我々が東北部の中心都市であるハイフォンで華人（広府人）に話を伺った時も、「ンガイ人はもうこの付近にはいないよ」「いまンガイ人は中国との国境ラインにあるモンカイとラオカイに少数いるだけだ」などの答えが返ってくるばかりであった。

我々が現在把握している限りにおいて、一部のンガイ人はホーチミンやビエンホアなどベトナム南部に居住している。また、海外に移住した多数のンガイ人は、北米やヨーロッパなどさまざまな国に住んでいるが、中国の華僑農場にも少なからず移住している。以下、ンガイ人の移住、アイデンティティ、およびそれと関連する生活実践について、ベトナム南部、ベトナム北部、および中国広東省の花都華僑農場の事例から報告していくことにする。

3. ベトナム南部のンガイ人

ベトナム南部に華僑が入植し始めたのは16、17世紀であると考えられている⁽¹²⁾。特にフランス統治時代には、サイゴン（今のホーチミン）に多くの華僑・華人が住み、貿易や商売などに従事していた。彼らは出身ごとに集団をつくり、広府人、福建人、海南人、潮州人、客家からなる「五帮」を形成した。現在でもホーチミンの第五郡には出身地ごとの会館があり、各会館には神々が祀られている。

(12) 芹澤知広「華僑華人 南部」末成道男編『ベトナム文化人類学文献解題——日本からの視点』東京外国語大学アジア・アフリカ文化研究所、2008年、130-131頁。

ベトナム南部の客家の大多数は、広東省から海路で移住してきており、現在はホア族に属する。彼らが中国から移住した具体的な時代は定かでないが、19世紀には採石労働者として広東省からビエンホアに移住したといわれる⁽¹³⁾。実際、ビエンホアにある石山古廟には、魯班神だけでなく、「旅越・邊和客帮衆先僑総牌位」と書かれた赤い位牌もある。彼らの多くは、広東省東部の大埔、興寧、梅県、紫金、および現地で「恵東宝」と称される惠州、東莞、宝安の出身者である。1949年の統計では、サイゴンのチョロン地区にいた40万人の華僑のうち、10.6%が客家であったという⁽¹⁴⁾。

広東省からベトナムに移った客家は、まず潮州系の義安会館に属し、1918年には金邊六省帮会所として独立した⁽¹⁵⁾。そして、1955年にはベトナム崇正会と名乗り、現在、ベトナム最大の客家団体となっている。ただし、ベトナム崇正会の成員は、大多数がンガイ人ではなくホア客家である。我々が調査したところによると、崇正会に属する70歳以上のホア客家はほぼ全員が幼少期から客家としての自己認識をもってたと答えており、客家アイデンティティが相対的に強い。もともとホア客家のなかにも3~5世代経っており、特に青少年層のなかには客家語を解さず、広東語やベトナム語で生活を送っているケースも珍しくない。こうした状況のもと、ベトナム崇正会の幹部は、客家語や客家文化の継承に熱心であり、2001年から客家語の授業を無償で客家の子弟に開くなどの

(13) 呉静宜『越南華人遷移史与客家話的使用——以胡志明市為例』国立中央大学客家語文研究所修士論文、2011年、122頁。

(14) 華僑志編纂委員会編『華僑志——越南』出版地不明、1958年、51頁。

(15) 呉静宜『越南華人遷移史与客家話的使用——以胡志明市為例』国立中央大学客家語文研究所修士論文、2011年、115頁。

活動を展開している。他方で、彼らは、1999年以降、客家文化を高揚する目的で、観音像、四面佛、客家公祠（客家の祖先を祀るお堂）などを配置した「客家聖地」を建設する動きをみせている。

しかしながら、ンガイ人がこうした動きに参加することはほとんどない。1954年の「南徹」以来、ベトナム東北部を拠点としていたンガイ人は、ハイフォンを経由して海路でベトナム南部に移住した。たとえば、ンガイ人は、ホーチミンの第六郡に自由村を形成しただけでなく、ドンナイ省のビエンホア、ロンカン、ディンクアンなどに定住した⁽¹⁶⁾。そうしたなか、ベトナム南部の多数派を占めるホア客家がンガイ人と接触する機会も次第に増していったが、ホア客家はンガイ人が「正統な客家」ではなく、異なる集団であるとみなすようになった。すなわち、ホア客家は、一方ではンガイ人が客家の系統に属することは認めつつも、他方で、「ンガイ人はヌン族と一緒に暮らすうちに客家の文化を忘れた」「ンガイ人は農耕を主としてきたため商売を主とする私たちとは生活習慣が異なる」「ンガイ語は確かに客家語に近い言葉を話す但訛りが強い」など、自らとンガイ人を差異化する発言を常に口にしてしているのである。

また、ンガイ人自身も、自らが客家であるとする自己認識を強くはもっていない。我々が話を伺ったホーチミン在住のンガイ人たちは、「ンガイ語は客家語と似ているが実際には異なる」「私たちは広西人であり今でも自分が客家であるとは思

(16)1979年の華人排斥運動以降、多くの華僑・華人がベトナムを離れたため、自由村など多くのンガイ人コミュニティも崩壊した。しかし、現在でもホーチミン、ロンカン、ディンクアンなどには少数ながらンガイ人が住んでいる。

っていない」と主張していた。人によっては、ヌンを自称する者もいた⁽¹⁷⁾。このように、ンガイ人は、外部者により客家と呼称されていることは知っているが、客家としてのアイデンティティを強くもっているわけではない。



写真2：ホーチミンの護国観音廟。右側は欽廉会館。

2010年、ンガイ人は、ホーチミンの護国観音廟内部で欽廉同郷会という地縁団体を結成した。欽廉は、清朝期の欽州府と廉州府を指し、現在の東興、防城港、北海、合浦などンガイ人の主要な出身地を指す⁽¹⁸⁾。もちろん欽州府と廉州府にはンガイ人ばかりがいるわけではないが、会長をはじめ多くのンガイ人が成員となっているため、ベトナム客家団体は欽廉

(17)ただし、彼らは昔から漢族としての意識をもっており、「ヌン」を自称していたのは中国人であることを隠すためであったと主張している。ヌンを名乗った理由は、「儂」（ヌン）が「農」と同じ発音であるため、農業をする集団という意味で使っていたという。

(18)この地域の「客家」も長らくンガイ人（またはンガイ語を話す人々）を自称してきたが、近年は客家文化政策の影響を受けて客家を自称するようになっている。

同郷会を客家団体として位置づけている。ただし、欽廉同郷会の成員は、この組織が完全に客家の団体であると考えているわけではない。彼らは、護国観音廟を精神的拠り所とし、広西人としてのアイデンティティを強くもっている。

4. ベトナム北部のンガイ人

フランス統治時代、華僑・華人は、ハノイ、ハイフォンを中心とするベトナム北部にも多く居住していた。ハノイに粵東会館と福建会館があり⁽¹⁹⁾、ハイフォンに中華会館があったことは⁽²⁰⁾、一定数の華僑・華人がいた証拠である。だが、1978年から79年に中越関係が悪化すると、特にベトナム北部の大多数の華僑・華人は中国やその他の国々に移住した。ハノイやハイフォンで華僑・華人について調査しようと手掛をさぐっていた時、「かつて〇〇には中国人が多くいたが今ではベトナム人の居住地になっている」といった類の言葉を何度聞かされたか分からない。また、華僑・華人が会館を中心に活動を展開している南部に比べ、北部では会館すら目立った形では存在しておらず、華僑・華人文化を謳う表立ったイベント

(19) ハノイの粵東会館と福建会館については、山本達郎「ハノイの華僑に関する資料」(『南方史研究』1、99-105頁、1959年)に詳しい。なお、我々は2014年1月2日に中国広東省花都市で調査をしていたところ、偶然、ハノイに昔在住していた1928年生まれの華僑に出会うことができた。彼は広西省防城港出身の広府人であったが、ハノイでは粵東会館に属していたという。粵東とは必ずしも現在でいう広東省東部を指すわけではなかったようである。また、彼の話によると、戦前のハノイには、粵東会館と福建会館のほか九江会館もあったという。九江会館は規模こそ大きくなかったが、江西省出身の華僑の団体であった。

(20) ハイフォン市内の旧中華街の近くにはかつて中華会館があり、今は市場になっている。この市場にある「三婆廟」は、今でこそベトナム人の信仰対象になっているが、かつては中華会館の主神であった。中華会館の主要構成員は、広府人と福建人であり、客家は昔からハイフォンにはほとんどいなかったと聞く。

もほとんど目にすることができない。現在、ベトナム北部に暮らす華僑・華人は、ベトナム人の居住区に混じって、中国を強調することなく暮らしている。

こうした状況もあり、現在のベトナム北部では外国人が華僑・華人に絡むフィールドワークをおこなうのが困難になっている⁽²¹⁾。しかし、我々は、呉がハイフォンで長年フィールドワークをおこなってきた関係で、特にハイフォン市内で多くの華人にインタビューする機会に恵まれた。ハイフォンの華人が推測するところによると、ハイフォンに現在居住する華人は約 200 名である。我々は、すでに 20~30 名の華人に会っているが、彼らはほぼ全員が広府人であり、ベトナム人を配偶者か嫁としている。ベトナム人との混血が進んでいるだけでなく、日頃からベトナム語を流暢に話し、ベトナム料理を食べ、ベトナムの習俗を話すなど、ベトナム社会に溶け込んで生活している。

ベトナム東北部は、かつてンガイ人の主要な居住地であった。そのため、南部では、ンガイ人を「ハイフォン客」と呼ぶこともある。ただし、ハイフォン市内に住む 60 歳以上の華人に聞いたところ、ハイフォンでは昔からンガイ人が多かったわけではなかった。たとえば、ベトナム戦争期に中華学校の校長をしていた A 氏（70 歳代、男性）は、「ンガイ人の生徒は 40 名のクラスのうち、1 人ほどであった」と述べている。ベトナム南部でンガイ人が「ハイフォン客」と呼ばれている理由は、クアンニン省など東北部に住んでいたンガイ人が、

(21)伊藤正子「華僑華人 北部」末成道男編『ベトナム文化人類学文献解題——日本からの視点』東京外国語大学アジア・アフリカ文化研究所、2008年、132頁。

1954年の「南撤」の時にハイフォン港から南部に移住したことによるという。

A氏と同じ学校で教員をしていたことのあるB氏（80歳代、男性）の話によると、1954年から79年までは、多数のンガイ人がベトナム東北部、特にクアンニン省に住んでいた。A氏とB氏は、1966年から72年にかけて、ベトナム戦争での疎開のため、生徒を引き連れてクアンニン省の山地で生活を送っていたが、そこは、まさにンガイ人の居住地であったという。彼らと生徒たちは、ンガイ人と日々接触し、ンガイ人の助けを借りながら生活してきた。

それでは、当時のンガイ人はどのような生活を送っていたのだろうか。我々の知る限り、当時のンガイ人の生活を描いた記録が残されていないため、当時のンガイ人の衣食住、及び彼らのンガイ人に対する印象などについて、A氏とB氏に下記のインタビューをおこなった（質問者は筆者であり、回答者は広府人であるA氏とB氏。2013年12月にハイフォン市内で実施した）。

〔問〕あなた方はどのような状況のもとンガイ人と接触したのですか。彼らにはどのような印象をもちましたか。

〔答〕1964年、アメリカ軍がハイフォンを爆撃し始めたため、我々の学校はクアンニン省の東潮県に疎開しました。ここの住民がンガイ人でした。ンガイ人の大多数は広西省からの移住者で、彼らの言葉は広東語とも異なっていました。ンガイ人は藍色や黒色の服を好んで着ていました。1973年、我々はハイフォンに戻りましたが、その後も我々は彼らを訪ねに行きましたし、彼らもハイフォンに来ました。しかし、1979年に中越関係が悪化すると、彼らはベトナムを離れ、一部は中

国に戻り、他は欧米に逃げていったのです。

〔問〕 ンガイ人とはどの言語で交流していたのですか。

〔答〕 あそこにはンガイ人のほか、キン族、ヌン族、サンジウ族がおり、みな広東語かベトナム語を話すことができました。ンガイ人とも広東語やベトナムで話していました。

〔問〕 ンガイ人は何を生業とし、どのようなものを食べていたのですか。

〔答〕 彼らは主に稲作に従事していました。穀物、ジャガイモ、サツマイモ、ピーナッツ、サトウキビなども好んで食べていました。彼らの家には大きな鍋があり、お粥を好んで食べていました。朝もお粥を食べ、仕事から帰ってもお粥を食べていました。お粥を食べる時、ピーナッツや塩漬けしたオリーブも一緒に食べていました。

〔問〕 ンガイ人はどのような所に住んでいたのですか。

〔答〕 彼らの祖先がどういうところに住んでいたかは知りません。でも、当時のンガイ人の住宅は、ベトナム人のそれとそれほど違ってはいませんでした。竹と木で組み立て、泥で壁を塗った住宅です。もし経済条件がよければ瓦をさらに加えますが、当時は戦争中でしたから、瓦も結構な費用がかかりました。ンガイ人は親戚と一緒に住むことを好み、イトコも近所にいましたが、家ごとに分かれていました。

〔問〕 ンガイ人の家庭ではどのように分業がおこなわれていたのですか。

〔答〕 当時のンガイ人は、農業などの重労働に従事していました。山に柴を刈りに行ったり、家を建てたりするのは男性の仕事。女性は、田植えをしたり、鶏を飼ったりしていました。子供の世話をするのはだいたい女性でしたが、男性も子

供を抱いたり食べさせたりしていました。ただ、男性が家庭にいるのは少なく、自分の仕事に従事していました。

【問】ンガイ人は他の華僑・華人とどういうところが異なっていましたか。

【答】ンガイ人は勤勉で、誠実であると、私たちはよく言っています。彼らは、我々に手助けをしても見返りを求めるようなことはしませんでした。ただし、民族としての違いは感じませんでしたし、生活していて慣れないということもありませんでした。彼らも華人の一系統なのですし、ンガイ語を話す同じ中国人といった感じです。

以上は、我々が実施したインタビューの一部であるが、当時のンガイ人の生活状況の断片を知ることができる。もちろん、当時が戦争中であったことを考慮に入れなければならないが、A氏やB氏によると、ンガイ人は質素で勤勉な集団であったようである。こうしたンガイ人に対する印象は、客家が質素・勤勉であるとする一般的な言説とも重なるところがある。

さて、インタビューの内容にもあったように、クアンニン省に居住していたンガイ人は、1979年以降にベトナムを離れていった。我々は、クアンニン省にまだンガイ人が残っていないか糸口を探っている段階であるが、「ンガイ人がもともと住んでいた村は廃墟になっていた」という話を聞くなど、まだベトナム北部で直接、ンガイ人から話を伺うには至っていない。いずれにせよ、もともとンガイ人が多かったクアンニン省とその周辺地域では、ほとんどンガイ人が住んでいない状況にあり、一時期は10万人いたと言われる人口も、すでにその足跡を辿るのが困難なほど減少しているということは確

かなようである。

5. 現代中国のンガイ人

以上のように、ベトナムでは、現在、南部を中心とするいくつかの地点に居住するだけとなっており、大多数が中国や欧米諸国などに移住している。換言すれば、ベトナム国内ではなく、ベトナム国外に行ったほうがンガイ人に会える確率が高まる。そのため我々は、ベトナムだけでなく、中国でもフィールドワークをおこなってきた。

中国でンガイ人の調査をおこなう時には、主に二つの方向がある。一つは、ンガイ人の故郷である広西省防城港から広東省の東部にかけての地域で、ンガイ人（中国語で「艾人」と呼ばれる集団を調査する方向である。彼らは、ベトナムに移住した経験をもたないが、ベトナムのンガイ人の源流ともいえる集団である。彼らの一部は、近年の客家文化政策の影響を受け「客家」を自称しているが、もともとはンガイと名乗り、今でも自らの言語をンガイ語と称することが多い（広西省玉林市の事例に代表される⁽²²⁾）。一部は、中国にあってもいまだに客家としての意識をもたず、ンガイ人と自称する者もいる⁽²³⁾。もう一つは、ベトナムから中国に帰国したンガイ人の調査である。彼らは中国の全土に分布しているが、特に南方の華僑農場とその周辺に多い。なぜなら、1978年以降、ベトナムで華人排斥の動きが高まるにつれ、中国に戻ったンガイ人は、まず政府により華僑農場に安置されたという経緯

(22) 河合洋尚「広西省玉林市における客家意識と客家文化」『客家與多元文化』7：37-38。

(23) たとえば、広東省廉江県では、ンガイ人というカテゴリーが存在するが、それが「客家」であると認識しない者が存在する。

があるからである。市場経済化が進むにつれ、ンガイ人は徐々に華僑農場を離れていくことになるが、現在でも華僑農場とその附近に住む者は少なくない。そのうち我々は、二種類のンガイ人のうち、後者に焦点を当てて、広東省広州市の北部に位置する花都華僑農場のンガイ人を、数度にわたりフィールドワークした⁽²⁴⁾。

まず、現地でベトナム華僑友会の要職にも就くC氏（ンガイ人）によると、花都華僑農場には約1500名のベトナム帰国華僑がおり、そのうち約1000名がンガイ人である。また、ンガイ人は、花都華僑農場に特別多いというわけではなく、深圳の光明華僑農場など、ベトナム帰国華僑の大半をンガイ人が占める華僑農場は他にもある。

それでは、花都華僑農場のンガイ人は、どのようにして中国に戻ってきたのであろうか。花都華僑農場の華僑事務所で勤務していたD氏（広府人）によると、この大多数のンガイ人は、ベトナムにおける華僑排斥の煽りを受け、1978年から79年に花都華僑農場に移住してきた⁽²⁵⁾。彼らは、広西省の防港、欽州、合浦、博白などにルーツをもつが、親戚を頼って故郷に戻ることなく、政府により花都華僑農場に住むよ

(24)我々が花都華僑農場を選定した理由は、調査機会を得たことによる。今後はさらに多くの華僑農場でンガイ人にまつわる調査を実施する必要がある。

(25)D氏によると、1978年から79年にかけて、多くのベトナム華僑は香港にも移住した。そのなかにはンガイ人もいた。今でも香港に在住するベトナム華僑は少なくないが、当時の香港政府は全ての移住者を支えきれなかったため、国連に申請して、欧米へ再移住させる方針を立てた。それにより、アメリカ、カナダ、イギリス、オーストラリアなどにンガイ人が移住していった。特にベトナム戦争の責任を取る形でアメリカに移住していったンガイ人は多く、今でもサンフランシスコ、ロサンゼルス、ボストンなどに居住しているという。アメリカ、カナダ、オーストラリアなどに居住するンガイ人の調査は今後の課題である。

うあてがわれた。もちろん花都華僑農場には、1950年代から60年代にもベトナムから帰国華僑が来たが、彼らは勉学のために戻った知識人で、数も少なかった。それに比べて、1978年から79年にかけて帰国したンガイ人は、さまざまな層からなっており、数も多かった。彼らは、ベトナムから帰国した経緯について次のように述べている(2014年1月2日の聞き取りに基づく)。

「私の祖父は1920年代に広西省防城県馬路鎮からベトナム・クアンニン省の広河県に移住しました。モンカイの近くです。当時の広河県はほぼ100%が華人で、なかでもンガイ人が大多数を占めていました。私は1952年生まれで、1979年の華人排斥運動の時に中国に戻り、花都華僑農場で居住しました。中国に戻った当初は、中国語が分からず、学び直しました」。(C氏)

「1979年の華人排斥の時、モンカイから花都の華僑農場に一家で移住しました。まだ11歳の子供でした。その後、結婚して惠州に行きましたが、兄が雑貨店やレストランなどを花都の農場近くで経営していたため、夫も連れて一家で花都に戻ってきました」。(40歳代女性)

「華人排斥運動の時に、モンカイから一家で花都華僑農場に来ました。今は魚屋をやっています。ベトナム帰国華僑の立場を生かし、ベトナム国境際のモンカイや東興から魚を輸入して売っています」。(50歳代女性)

彼らは、いずれも広西省をルーツとして、ベトナム東北部に住んでいたが、1979年に中国に帰国し、帰国後は縁もゆかりもなかった広東省珠江デルタ一帯で生活している。花都華

僑農場は、経済的に裕福な珠江デルタ一帯に位置しているため、ここのンガイ人の暮らし向きは相対的に良い。現在の華僑農場では、農地が減少し、近代的なアパートが林立している（写真3）。経済的利益や社会的地位を得て、華僑農場の外に出たンガイ人も少なくない。



写真3：花都華僑農場

さて、彼らは、広西省の防城港などをルーツとし、ベトナムではンガイ人と自称していたが、今では、外部の人間に対して、自身が客家であると主張するようになっている。

我々が花都華僑農場で初めて調査した時も、彼らはみな客家を自称し、彼らの言葉が客家語であると話していた。しかし、これは外向けの言葉であり、さらに調査を進めていくと自らをンガイ人と自認しており、彼らの言語がンガイ語であると考えていることが明らかになった。彼らの多くは、ンガイ語は客家語の系統であるが、「彼らのンガイ語が『硬い』言葉で梅県の客家語は『柔らかい』言葉である」などと区別する。また、彼らは、もともと客家を知らず、中国に来てから

自分が客家であることに気づかされたのだという。このことについてC氏は過去を振り返り以下のように語る。

「私はもともと自分がンガイ人だと思っており、客家であることを知りませんでした。1979年にベトナムから中国に戻ってきた時、花都華僑農場の周囲の人々は、私たちと似たような言葉を話していました。彼らは、客家としての意識をもっており、この言葉が客家語であると教えてくれました。その時、私たちは自分が客家であることにはじめて気づかされたのです。確かに私たちの言葉は『硬く』、梅州の客家語は『柔らかい』ので、違いはあります。ただし、私たちの多くは防城県の出身で、祖先が福建省から来たという話を上の代から聞いたこともありますから、客家であることは確かです」(C氏、2014年1月2日)。

さらに興味深いのは、C氏をはじめとする花都華僑農場のンガイ人は、ベトナムの53の少数民族に『ンガイ族』という民族があり、彼らがそれに相当することを知らなかったということである。これについて、C氏らは、「ベトナムでは自らが漢族であり、ンガイ人は漢族の一系統であると考えていたが、『ンガイ族』という少数民族であったとは聞いたことがない」と述べていた。この背景には、この民族の認定が1979年という、彼らがベトナムを離れた年であったことが関係していると推測される。

このように、彼らのアイデンティティは、まずンガイ人であり、次いで中国でよくレッテルを貼られる「客家」「ベトナム帰国華僑」である。特に、彼らは外向けには客家およびベトナム帰国華僑の名称を使う。したがって、彼らは外向けに

ンガイ人と名乗ることはなく、イベントや料理名などに「ンガイ」を使うことはない。彼らは、客家やベトナム華僑の名を目に見える形で提示している。

たとえば、我々は調査の過程で、ンガイ人の特色を利用したレストランが花都華僑農場にあるという話を聞き、その店を訪ねたことがある。ここのオーナーであるE氏は1979年にモンカイから花都華僑農場に移住したンガイ人である。



写真4：花都華僑農場のレストランの看板

このレストランでは、「越南扣肉」、「越南煎粽」など、ベトナム（越南）の名を冠した料理が提供されているが、実際にはンガイ人の料理であるという。ただし、花都華僑農場のンガイ人にベトナム時代の食事を聞いてみると、朝昼晩の主食は基本的にお粥で、魚（特に干し魚）、野菜、ピーナッツ、塩漬けたオリーブ、煎堆、そしてベトナム料理のフォーを日頃から食べる事が多く、「扣肉」は春節など特別な時にしか

食さなかった⁽²⁶⁾。これらが特色として強調される理由は、中国で客家料理と結び付けられるからであり、必ずしもンガイ人が日常的に食べていたからではない。ンガイ人は、中国に戻った後、客家としての自己に気付いたばかりでなく、文化のうえでも「客家らしさ」を学ぶようになっている。

6. おわりに

本稿は、ベトナム客家の概況について、特にンガイ人に焦点を当てて論じてきた。我々のンガイ人研究は端緒についたばかりであるが、ンガイ人の輪郭については描き出すことができたと思う。本稿で明らかになったンガイ人の基礎資料を整理すると以下の通りである。

第一に、客家はベトナムに移住後、ホア客家とンガイ人との、少なくとも二つに分類されるようになった。両者は起源と移住が異なっており、ホア客家が広東省中・東部から海路でベトナム中・南部に移住したのに対し、ンガイ人は広西省から陸路でベトナム北部に移住した。

第二に、ホア客家とンガイ人は、中国での出身地とベトナムでの職種が違うため、異なる集団として互いを差異化している。つまり、ホア客家は広東省中・東部の客家語をベースとし商業に携わってきたのに対し、ンガイ人はンガイ語と呼ばれる広西客家語をベースとして、主に農耕や漁業に携わってきた。

第三に、ベトナムではホア客家が「正統な」客家とみなさ

(26) 2014年2月、多くのンガイ人のルーツである防城港の那良鎮や大茶鎮を訪れた時、客家料理として挙げられるのは「白切鶏」であり、「扣肉」や「煎粽」はあまり食べないと説明された。「艾糍」は日常的に食べられていたが、ンガイ人や客家の特色とは主張していなかった。

れるのに対し、ンガイ人は「ハイフォン客」と呼称されるなど、「正統ではない」客家として扱われがちである。ンガイ人自身も、自らを「広西人」「ヌン族」などと自称しており、ホア客家のように強い客家アイデンティティをもたない。そのため、ホア客家のように、客家文化に関連する活動をおこなっていない。

第四に、ンガイ人は、1970年代末にベトナムを次々と離れていったが、中国に移住した者のなかには、かえって客家意識を強めることがある。彼らは内向きにはンガイを自称しているが、外向きには客家や華僑としての身分を強調し、ある程度、中国での客家文化表象と軌を一にすることがある。

こうしたンガイ人をめぐる輪郭は、今後の調査の展開によっては微調整が必要になるかもしれないが、現段階では、基本的な枠組みとして提示できるものと確信する。そのうえで我々が今後すべきことは、何よりもまず、ベトナム国内外のンガイ人に関するデータの収集を進めていくことである。

ベトナム国内の調査については、ベトナム中・南部の護国観音廟の分布をデータ化し、そこからンガイ人の分布を把握して、より多くのインタビューをおこなっていく必要がある。特に、我々はまだベトナム中部における調査をおこなっていないので、ホイアンやフエでも調査を展開していかねばならない。さらに、中国人向けの観光ガイドを職業とするB氏の息子によると、ベトナム北部から完全にンガイ人がいなくなったわけではなく、中国—ベトナム間の通行口であるモンカイとラオカイに一定数いるという。ラオカイの対岸にある中国雲南省の河口にも客家の居住区があると聞く。そのため、国境周辺におけるンガイ人（客家）の流動についても調

べる予定でいる。

他方で、ンガイ人の研究で欠かせないのは、ベトナムの外に移住したディアスポラへの調査であろう。本稿で例を挙げたように、我々は花都華僑農場ですでにンガイ人にまつわる調査を進めているが、ンガイ人の生活、アイデンティティや文化表象は、中国のどこに行くかで大きく変わってくるであろう。同様のことは、アメリカ、カナダ、オーストラリアに移住していったンガイ人にも該当する。

特に、ベトナムや中国ではない第三国に移住していったンガイ人を調査する際、注目に値するのは、彼らがベトナムや中国にいるンガイ人とどのような国際ネットワークをつくりあげるかである。ベトナムから第三国に移住したンガイ人の少なからずは難民であるため、おそらく大半はベトナムや中国との関係を絶ち、移住先の華人社会に適応していくものと予想される。しかし、たとえば、中国の防城港のンガイ人地域で祠堂を再建する時にアメリカやカナダからの寄付が多いように、国際的なつながりが、文化の再生と創出に一定の作用を及ぼすことがある。

華僑・華人は、世界に多くの移住者を抱えるディアスポラであるが、中国を含めた同時代的な文化的ネットワークに着目する研究は決して多くはない。こうした国際的ネットワークを多地点民族誌 (multi-sited ethnography) としてンガイ人を描き出していくことが、今後の課題となる。

(作者：河合洋尚 日本 国立民族学博物館助教 社会人類学博士
呉雲霞 中国 広東外語外貿大学講師 文化人類学博士)